



FUJITSU ファミリー  
2020年度秋季大会 教養セミナー

俳優・歌手

中村 雅俊 氏

### Profile

1951年宮城県牡鹿郡女川町生まれ。1973年の慶應義塾大学在学中、文学座附属演劇研究所に入所。1974年にNTV「われら青春！」の主役に抜擢され俳優デビュー。挿入歌「ふれあい」で歌手としてもデビューし、売上げが100万枚を超える。今までに連続ドラマ34本を含め、主演作品は100本以上。歌手としてもコンスタントに曲を発表し、現在シングル55枚、アルバム41枚をリリース。デビューから毎年行う全国コンサートも1,500回を超えている。

※こちらの画像は、オンライン画面からの切り取り画像となります

## 故郷 東北復興への思い

### 故郷・女川町で 過ごした日々

俺が生まれ育った女川町は、三陸地方の「リアス式海岸」と呼ばれる地形を利用した漁港で、人口1万人くらいの町なのに飲み屋は200軒ほどもある、活気あふれる港町でした。

誰がどうしたとか、すぐに知られる小さな町で、俺は授業中でもバカやって怒られたり、悪い意味で目立つ存在だったので、周りから「おだずもっこ」と呼ばれていました。標準語でいえば「ひょうきん者」ですね。中学生くらいから身長が伸び始めて、高校までバスケに明け暮れる毎日でしたが、今、振り返ってみれば周りは男ばかり。そんな地元の仲間たちとは、高校を卒業して東京の大学に進学してからも、役者デビューしてからも、変わらぬ付き合いが続いています。

### 1960年5月に チリ地震津波を経験

チリ地震津波を経験したのは小学生の頃で、遠い南米で起こった地震による津波が、太平洋をまたいで日本にまで押し寄せてきたことに、驚きと同時に恐怖を感じました。

津波が来たのは明け方のことで、急なサイレンに起こされ、避難指示のアナウンスに慌てて裏山に逃げました。そこから女川湾を見下ろしていると、湾内の海底が見えるほど波が引いたあと、ゆっくりと波が押し寄せて来ました。波を背にしながら高台に逃げてくる人々の姿が、今も目に焼き付いています。

リアス式海岸は入江が細くなっている分、津波が高くなりやすいので、この地域の人たちはみんな「地震があったら津波がくる」と常に意識しています。俺もこの時の経験から「地震＝津波」を意識するようになって、その後も地震で津波警報が出るたびに荷物を二階に運んだりして、いわば女川時代は津波や地震と共存してきたという印象ですね。

### そして2011年3月、 東日本大震災

あの時、俺は都内でドラマの撮影中でしたが、経験したことがないほど大きな揺れを感じました。ニュースを見ると、震源地は三陸沖で、女川町と同じくらいの緯度だとわかって、すぐに「これは津波が来るんじゃないか」と不安に思いました。

最初に津波の映像を見た時には、言葉にならなかったですね。子供の時に見たチリ地震津波も怖かったのですが、その時とは比べものにならない規模で、どれだけの被害かもすぐにはわからないほどでした。

数日、数週間と経つ内に少しずつ状況がわかってくると、親戚や親しい人の被害も伝わってきました。身近な人たちがいきなりいなくなるというのは、あまりに突然で「えっ」と言うしかなくて、地元で電話をかけようにも、なんて言っていないかわからなかったですね。

### チャリティ活動を開始し、 幾度となく被災地を訪問

震災後、被災地のために何かで

きないか考えていると、香港で行われたチャリティイベントへの出演依頼がありました。ジャッキー・チェンさんの呼びかけで、アジア各地からスターが集まって義援金を募るというイベントで、俺も現地で人気の「俺たちの旅」の主題歌を歌わせてもらいました。震災から1か月も経たない4月1日に、香港の放送局すべてが放送してくれて、香港の人たちの気持ちがすごくありがたかったですね。

実際に女川町を訪れたのは4月14日で、夜中にワゴン車をレンタルして、支援物資を詰め込めるだけ積んで出発しました。故郷の姿は想像を絶するもので、自分の覚えていた景色が一変していて、本当に瓦礫だけ。実家の場所すらわからなくて、本当に破格の津波だったんだと実感しました。

高台から瓦礫まみれの町を見下ろしたら、「こんなに小っちゃな町だったのか」と驚きもしましたが、地元の友人たちに会ってみると、意外なほど元気なんです。人間って、あまりに辛い経験をすると、かえって「頑張らなきゃ」と思うんですかね。あれから10年間、その気持ちを持ち続けて頑張っている彼らの姿を見ると、頭が下がる思いです。

俺も自分にできるだけのことはしようと、義援金を募って女川町にトレーラーハウスを寄贈したり、地元のスポーツ少年団に寄付したりと、様々な取り組みをしましたが、中でも強く感じたのが「歌のチカラ」でした。

## 歌を歌うことで故郷の復興を後押し

被災した人たちって、明るくふるまっても、どこかに悲しみがあるんです。せめて歌を聞いている瞬間だけでも、悲しみを忘れ

てもらえないだろうか。そんな思いから、被災者が集まる場所を探しては、ギターを持って行って歌うようになりました。

俺が20歳の頃に作った「私の町」という歌があるんですが、それを聞いた人たちが、気が付くと涙していて。それはきっと、俺の拙い歌から、今はもうない女川の景色を思い出してくれているんだろうと思うんです。こんな歌で、こんなにも涙してくれるのだから、俺自身が泣きそうになって、「歌のチカラ」ってすごいなと改めて感じました。

歌といえば、宮藤官九郎さんと「予定～宮城に帰ったら～」という復興チャリティソングを歌ったことも忘れられません。歌の最後に、アドリブで「オナガワ～！」とか東北の町の名を叫んだ時は、こみ上げてくるものがありましたね。

女川町に近い東松島市から校歌の依頼もありました。被災した2つの小学校を統合して新設される小学校に、新たな校歌を作りたい。そのお披露目会で、俺が作った新しい校歌を歌ったあと、お返しにと今度は子供たちが校歌を歌ってくれたんです。低学年の子たちだとメロディーも拙いんだけど、懸命に歌っている姿にジーンときちゃいましたね。

## 復興する被災地を伝え続ける

東日本大震災から10年経ちますが、その間にもいろんな自然災害が起きていますから、人々の記憶から薄れてしまうのは仕方がないことです。とはいえ、東北の復興はまだ道半ばなので、地元の間人としては、できるだけ多くの人に知ってもらいたい。だから俺もメディアに出る機会があれば、震災

のことを語るようにしています。

中でも、BS朝日の番組で被災地の現状をレポートさせてもらったのは、良い経験になりました。この番組を通じて、地域によって復興のスピードに格差が生まれていることや、建物や道路を元通りにしても人々が帰ってこない意味がないということなど、いろいろなことを気付かされました。

実際、女川町では人口の約1割が亡くなったうえに、働く場所を求めて別の土地に移動した人も多く、そちらに定着したまま戻ってこない人も少なくありません。地元に残っていても、周囲に親しい人たちがいなくて孤独に苦しんでいる人もいます。町の外観を整備するだけじゃなく、そこに住む人たちがいて、その人たちが幸せを実感できていて、初めて本当の復興になるんじゃないかと思っています。

## 常に前を向いて困難に立ち向かう

被災地に対して自分に何ができるか、今も考え続けていますが、年齢と共に体力だけでなく気力も衰えていて、どうしても弱気になりがちなんです。それでも、めげない気持ち、困難と戦う気持ちを持ち続けることが大切だと思うんです。

人ってよく「幸せ」と口にしますが、幸せってカタチのあるものではないし、ただ漠然と待っているだけの人生では、たぶん幸せにはなれないと思うんです。自分で目的や目標を設定して、それを達成するために苦勞を乗り越えていく。その先に幸せというものが見えてくるような気がします。震災からの復興も同様だと思うので、これからも女川町や東北の復興に向けて、自分にできることを探していきたいと思います。